

様 式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

科学研究費助成事業 研究成果報告書



平成 30 年 6 月 14 日現在

機関番号：24302

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2015～2017

課題番号：15K14099

研究課題名(和文)江戸時代の寺社内営繕活動からみた近代の建築保存活動の生成土壌に関する基礎的研究

研究課題名(英文)The Basic Study on a Breeding Ground of the Conservation of Buildings in Modern Times Through the Construction and Maintenance of the Temples and Shrines in the Edo Period

研究代表者

中西 大輔(NAKANISHI, Daisuke)

京都府立大学・生命環境科学研究科・研究員

研究者番号：20727672

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,400,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、明治時代に社寺の修理や設計に携わった建築技術者の背景を江戸時代に遡って明らかにしようとしたものである。そのために、江戸時代の上賀茂神社・下鴨神社を対象に、神官の営繕活動と宮大工の組織について比較検討した。また、明治時代の京都を対象に、新規の建築技術者が社寺建築の技術を体得していく過程を明らかにした。そして、江戸時代の宮大工と明治時代の建築技術者との関係を見出した。

研究成果の概要(英文)：This study aims to clarify the background of architectural engineers in modern times by dating back to the Edo period. I researched how shinto priests and carpenters at Kamigamo Shrine and Simogamo Shrine had constructed and maintained the buildings in the Edo period. I also researched how an architectural engineer in Kyoto had learned his skills in the Meiji era. As a result, the relationship between a carpenter in the Edo period and an engineer in the Meiji era was found.

研究分野：日本建築史

キーワード：賀茂別雷神社 賀茂御祖神社 造営組織 宮大工 江戸時代 明治時代

1. 研究開始当初の背景

本研究の目的は、明治期の建築保存に携わった技師や大工などの背景を江戸時代に遡って明らかにし、近世・近代における建築保存に対する認識を連続的に理解することである。

歴史的建造物保存の初期段階にはそれまで寺社で活動した宮大工などが大工・技師・教師として大きな役割を果たした(清水重敦『建築保存概念の生成史』中央公論美術出版、平成26年2月)。堺の宮大工木村米次郎、松尾大社社家出身の松室重光、禁裏大工家の木子清敬などが知られている。このような人々の活動は、木子清敬に日本建築学を習った伊東忠太、その伊東忠太の授業を受け文化財修理に携わるようになった亀岡末吉などへと繋がっていく。そして、亀岡末吉などによる文化財修理では、未指定建築物などには技師の趣向が多く取り入れられたものもあったことが指摘されている(廣岡幸義「文化財修理における細部意匠整備 亀岡末吉の文化財修理 その1」『日本建築学会計画系論文集』2009年3月)。

そのため、江戸時代の寺社における営繕活動の経験が、近代以降の技手・大工としての活動にも影響を及ぼした可能性がある。松尾大社社家出身の松室重光のような寺社出身の技師や大工も、教育や実務などを通して指導を受けている場合が多い。しかし、近代以前に行なわれた寺社境内の維持管理に対する考え方を直接に、また間接に、吸収していたと考えられる。

このような維持管理に対する考え方は、寺社における建築物の保存・改築・解体の歴史を通じて蓄積されていったものである。したがって、近世以前の維持管理に対する考え方は、近代の保存活動の起源のひとつに数えうる。

しかし一般的に、営繕活動がどのような判断のもとで行なわれたのかについてはあまり知られていない。

2. 研究の目的

本研究は、近世に寺社の営繕活動を通じて培われた経験や思想が近代の建築保存の方針に与えた影響を明らかにすることを目的としている。

そのために以下の3点を行なう。

- ・京都の神社・神官などに関わる古文書を解読することで、江戸時代の寺社における神官による営繕活動の実態を明らかにする。
- ・同様の手法で、江戸時代の寺社における宮大工組織による活動の実態を明らかにする。
- ・京都の神社・神官・大工などに関わる古文書を解読することで、明治時代の京都における建築保存活動の実態を明らかにする。

3. 研究の方法

本研究では主に以下の史料を用いた。

- ・上賀茂神社の日々の出来事を記した日記
- ・上賀茂神社の由来を後世にまとめた社記
- ・上賀茂神社社家に伝来した日記
- ・下鴨神社の日々の出来事を記した日記
- ・下鴨神社の由来を後世にまとめた社記
- ・下鴨神社社家に伝来した日記
- ・大徳寺大工家に伝来した文書
- ・禁裏大工家に伝来した文書

各日記を調査し、江戸時代の営繕活動の記録を抜き出し、誰が、どの建築物に対して、どのような、営繕活動をしているか検討した。また、社記の記述と比較し検討した。

次に、近代の京都における動向に関する記録を抜き出し、近代の建築保存活動に携わった社家の経歴を明らかにした。木子文庫(東京都立中央図書館)所蔵の大徳寺大工林家および禁裏大工木子家の文書および既往研究(稲葉信子『木子清敬と明治20年代の日本建築学』(東京工業大学学位論文、1990年3月)ほか)も参照した。その過程で登場する人物についても、明治期の建築関係者を扱った既往研究(小沢朝江「明治宮殿造営組織における図工の職務と就業状況」『日本建築学会技術報告集』(第19巻第42号、2013年6月)ほか)に登場する人物でない場合は、社家との関わりという側面について検討した。

そのうえで、近代の文化財修理などに対して、江戸時代の寺社における営繕活動が与えた影響を検討した。

4. 研究成果

まず、本章で用いる用語の確認をしておく。階層構造をもった組織を階層組織とする。また、「一般の意味での大工、棟梁」と「階層組織の名称としての大工、棟梁」を区別するため、「一般の意味での大工、棟梁」のことは建築工匠と呼び、「階層組織の名称としての大工、棟梁」を「大工、棟梁」と呼ぶことにする。ただし、「宮大工」など「一般の意味での大工」に含まれるものであっても「階層組織の大工」と混同しないものについては、「宮建築工匠」などとはせず、「宮大工」のままとする。

江戸時代における上賀茂神社・下鴨神社の営繕活動

上賀茂神社

江戸時代、上賀茂神社の営繕活動は神官の持ち回りで行なわれた。元禄5年(1692)以前は月奉行と呼ばれる月交替の役職にあった神官が中心となり、必要に応じて臨時的に奉行が任命された。元禄5年(1692)以降は修理方と呼ばれる専門の営繕組織が発足し営繕活動を行なった。ただし、いずれの場合においても営繕活動の方針は神官による合議制のもとで決定された。そのため、方針に

急激な変化はなかったとみなせる。

下鴨神社

下鴨神社の営繕活動は固定された2家の神官によって行なわれ、神殿守と呼ばれた。中世には造営方・造営奉行という役職があり（浜島一成『中世日本建築工匠史』相模書房、平成18年9月）主に祢宜という位置にあった者が務めていた。一方、神殿守は2家ともに氏人であり、体制が整うのは元禄3年（1690）とされている。このことから、神殿守は造営方・造営奉行とは異なるものであることがわかる。営繕活動にあたり、神官の長である祢宜・祝に相談されることはあったが、上賀茂神社ほど合議制に基づいた営繕活動が行なわれていたのではなかったようである。ただし、代々受け継がれた方針があったと思われる。そのため、担当者が変わったとしても急激に変化することはなかったとみなせる。

江戸時代の下鴨神社の宮大工組織

上賀茂神社

江戸時代における上賀茂神社の宮大工組織は「大工・棟梁・長」という階層組織であった。中世の嘉元度造営では古代の階層組織として知られている「大工・長・連」が確認できる。

江戸時代の宮大工は本殿・権殿それぞれにほぼ同じ人数が置かれている。具体的には本殿に大工1人・棟梁1人・長3人、権殿に大工1人・棟梁1人・長2人である。それぞれ正大工、権大工、正棟梁……という。造営時の儀式などに限らず日常的に定められた階層であった。遅くとも17世紀以降構成は変更されず、独立した数軒の宮大工家からなっていたとみなせる。

古代の性質を残している中世の宮大工組織と比べると共通点がある。中世・江戸時代の長以上の階層の人数は同じである。儀式時における役割をみても、嘉元度造営における長の上位2人と江戸時代の棟梁の担っている役割はほぼ同じである。長7人のうち2人が江戸時代の棟梁に充てられたとみなせる。そのため、この古代の階層組織が基になっていると思われる。

下鴨神社

江戸時代の下鴨神社の宮大工組織は「神工・棟梁・小棟梁」という階層組織であった。中世の治承度造営などでは中世の階層組織として知られている「大工・引頭・長・連」が確認できる。

江戸時代の宮大工は西本殿・東本殿それぞれに同じ人数が置かれた。具体的には西本殿に神工1人・棟梁2人・小棟梁5人、東本殿に神工1人・棟梁2人・棟梁5人である。それぞれ西神工、東神工、西棟梁……という。天保年間までは造営時の儀式などに限らず日常的に定められた階層であった。しかし、

天保年間に構成が変更され、日常的には神工3人、棟梁3人となり、造営時には神工2人、棟梁4人として活動したようである。ただし、3人目の神工も神工家の出身であった。江戸時代を通じて特定2姓の宮大工によって上位が占められたことになる。

構成が変更された理由は以下のものであった。天保年間に神工の1人が役務停止となり、棟梁の1人が代理を務めた。神工の復帰後もこの棟梁が神工として同じ階層にとどめられたことによるようである。この新しい神工は賀茂御祖神社第一摂社の河合社に充てられたようで、河合社神工などと表記されている。

中世の宮大工組織と比べると構成・名称が異なるほか人数が減っている。中世の引頭6人に対して江戸時代の棟梁4人と減っている。中世の長・江戸時代の小棟梁はともに10人であり、長が小棟梁の前身に相当するとみなせる。ただし、正徳度造営における木造始めでは小棟梁は8人となっている。当時は8人であったのかもしれないが、儀式では役割を分担しない小棟梁もいたのかもしれない。

明治時代の京都における技術者の系譜

明治時代、上賀茂神社の社家出身者が建築技術者となっている。この社家を指導したのが青木利三郎であった。青木利三郎は、江戸時代よりも前に上賀茂神社第一の宮大工（正大工）であったとされる林家出身の林宗栄とともに、木子清敬の古社寺調査に携わった建築工匠として知られている。

寺院の図面作成にあたって、他寺の宮大工の仲介により、別系統の建築技術者に依頼される場合があった。西本願寺の宮大工が青木利三郎を通じて上述の上賀茂神社社家出身者に複数の寺院の図面の作成を依頼している。青木利三郎のもとには複数の弟子がおり、分担することもあった。

また、新規の技術者のなかには江戸時代の宮大工出身者などと交流をもつ者もいた。上賀茂神社社家出身者は下鴨神社の宮大工出身者に建築技術書を借りるなどの交流をもっている。

このように、新規の建築技術者のなかには宮大工に師事したり、宮大工の所持している文献などから知識を得たりしていたことがわかった。とくに宮大工との師弟関係から文化財関係の仕事に関わる機会を得ることが、社寺建築の技術を体得していくうえで重要であったようである。これらの点については現在論文作成中である。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 3件）

中西大輔、「賀茂御祖神社の営繕組織について」、『日本建築学会大会学術講演梗

概集（中国）¹、査読なし、建築・歴史意匠、2017年、pp.103-104
中西大輔、「賀茂別雷神社修理方発足以前の造営組織」、『建築史学』²、査読あり、66号、2016年、pp.24-38
中西大輔、「賀茂御祖神社宮大工の編成」、『日本建築学会大会学術講演梗概集（関東）』³、査読なし、建築・歴史意匠、2015年、pp.245-246

〔学会発表〕（計 3件）

中西大輔、「近世賀茂社の造営組織」、日本建築学会近畿支部建築史部会研究発表会、2018年7月28日、大阪科学技術センター1階会議室（大阪府）
中西大輔、「賀茂御祖神社の営繕組織について」、日本建築学会、2017年9月1日、広島工業大学（広島県）
中西大輔、「賀茂御祖神社宮大工の編成」、日本建築学会、2015年9月4日、東海大学湘南キャンパス（神奈川県）

〔図書〕（計 0件）

なし

〔産業財産権〕

なし

出願状況（計 0件）

名称：なし
発明者：なし
権利者：なし
種類：なし
番号：なし
出願年月日：なし
国内外の別：なし

取得状況（計 0件）

名称：なし
発明者：なし
権利者：なし
種類：なし
番号：なし
取得年月日：なし
国内外の別：なし

〔その他〕

ホームページ等
なし

6. 研究組織

(1) 研究代表者

中西 大輔 (NAKANISHI, Daisuke)
京都府立大学・生命環境科学研究科・共同研究員

研究者番号：20727672

(2) 研究分担者

なし ()

研究者番号：

(3) 連携研究者

なし ()

研究者番号：

(4) 研究協力者

なし ()